



Title	皇道と儒道
Author(s)	秋月, 胤継
Citation	懷徳. 1941, 19, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

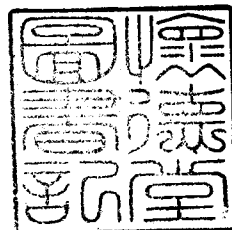
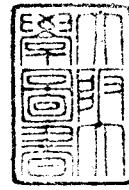
懷德

第十九號

皇道と儒道

秋 月 胤

繼



皇道と儒道と申す題で兩者の關係異同を概略申述べたいと存じます。それには先づ皇道の本質と儒道の本質とを明にし、之を比較して見ますと、自ら此の演題の趣旨を明にすることが出来ます。先づ皇道の本質より申述べます。皇道の本質を明にするには我國最古の典籍たる記紀即ち古事記と日本書紀とを精讀するを要します。我國の國土は伊弉諾尊と伊弉冊尊との御創造になつたものでありますが、我國家を經營する道は天祖天照大神に淵源致してをるのでありまして、即ち天祖が天孫瓊杵尊をして此の國土を統治せしめられました時に賜はりました神敕並に之を同時に授け給へる三種の神器に寓せられたる大御心に其源を發してをります。天祖が天孫をして此の國土を統治せしめられたる時賜はりました神敕に葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地、宜汝皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與

天壤無窮者矣。とありまして、此の神敕によつて道の大綱たる君臣父子の分が嚴平として確立され、萬世一系の國體の基礎が置き据ゑられ、確乎不拔のものとなつたのであります。之と同時に三種の神器が授けられました。八咫鏡・八坂瓊曲玉・天叢雲劍が即ち其れでありまして、之を授けらるる際、特に鏡に對しては之を視ること當に朕を視るが如くし、與に殿を同じくし床を共にして以て齋鏡ハヒノとなす可しとの給はせられてをります。三種の神器を授け給へる天祖の大御心を拜察致しますと、實に深き神慮が之に寓せられてをるのでありまして、其の神慮の中に吾日本の道德並に政治が淵源致してをります。今此の三種の神器に寓せられましたる天祖の神慮を拜察し奉りますと、鏡は其實玲瓏として萬物を照らし其の真相を寫し出すものでありまして、人の徳でいへば知に當ります。知の徳に依らざれば萬民の上に臨んで眞に正善なる政治を行ふことは出來ませぬ。玉は溫潤にして物を和ぐる性質を有つてをりまして、人の徳でいへば仁に當ります。仁の徳に依らざれば徳政を施して人民を愛撫することは出來ませぬ。劍に至つては、いざといふ時は物を斬る作用を爲すものでありまして、人の徳でいへば勇に當ります。勇の徳に依らざれば仁政を施し、教化を行ひ、教に従はざる者あらば之を征伐して國家の統一安寧・秩序を維持することは出來ませぬ。乃ち天祖天照大神は三種の神器に寓するに此の智・仁・勇の三徳を以てせられ、此の三徳を以て天下に君臨し、萬民を治め教へて、豐葦原の瑞穗の國を治む可きをの給はせられたのであります。そして天祖は御自ら其通りに御實行あらせられま

した。即ち天祖が天壤無窮の神敕を賜りて國體の基礎を置き、君臣父子の分を正され、三種の神器を授けて經國の道を明に示されましたるは智の徳の發用であります。天祖御自ら種穀養蠶の道を御開きになつて人民をして生活上尤も大切な衣食の資を得しめられ、又當時の神神が天祖の意を體し奉りて或は醫療の道を或は造家の法を示して利用厚生の道を開き人民をして生を養ひ居に安んじ各其所を得しめられましたるは仁の徳の發用であります。又當時天孫の降臨に際し武甕槌神・經津主神を下して神化に従はざる者を征伐して日本の國土を統一し天孫降臨の素地を爲さしめられたるは勇の徳の發用であります。かくて天祖の盛徳大業は六合に光被し、やがて神武天皇が八紘一字の大理想の下に吾日本帝國を御肇建になつたのでありまして、天祖以來吾皇國の基を樹つることの誠深きを見ることが出来ます。爾來神子聖孫世世天祖の遺訓を守らせ給ひ、神器を奉じて萬方に君臨し、萬民の父母として日本の國土を治められ、國民も亦歷代聖徳の感化を蒙りて仁厚にして勇武、克く皇室を翼戴して萬世一系の國體を擁護し奉りて今日に及んでをり、吾國の道德及政治の基礎は此に確立して動かす可からざるものとなりました。且鏡を授けられたる時、之を視ること猶ほ朕を視るが如くし殿を同じくし床を共にして以て齋の鏡と爲す可しとの給はせられたる神訓は、之に因つて敬神崇祖の義を明示され、吾國に於ける祭祀の道を御立てになつたものでありまして、報本反始の義も明確にされ、今日に至るまで列聖は克く此の天祖の遺訓を奉體して御實行遊ばされてをります。天祖の遺訓は之を要する

に敬神崇祖・愛民・尙武の三者に歸著するのでありまして、更に之を要約しますと智・仁・勇の三徳となるのであります。是に因つて見ましても吾國に於て道といふは即ち天祖より授けられる道即神道でありまして、之れが今日皇道と稱せられてをる所のものであります。吾神道今日の所謂皇道の淵源と其實體とは上述に因つて大要之を了知することが出來ると思ひます。

但吾國は元と言擧げせざる國柄でありまして、上古には斯道を言ひ現はすに適當なる言語と文字とを有つてゐなかつたのであります。然るに此に尤も都合よき事には吾國固有の道と其根柢に於て同一であり且其道を言ひ表はし書き表はすに適當なる言語と文字とを具備せる教が朝鮮を経て支那より傳來しました。即ち隣邦支那に起りたる儒教は其説く所の根本思想も亦智・仁・勇の三徳を以て道を脩め政を行ふに在るのであります。此教が人皇第十六代應神天皇の十五年に三韓の百濟國より來朝せる阿直岐によつて吾國に傳へられたのでありまして、天皇は大に之を喜ばれ直に皇太子菟道稚郎子をして就て學ばしめられ、更に阿直岐の推薦にて翌十六年に百濟の博士王仁が來朝し論語及千字文を獻じたる事が吾國の正史に見えてをります。之れが吾國固有の道が儒教と接觸したる始でありまして、歷代の天皇亦此教を尊んで之を獎勵せられましたので、恰も水の低きに就いて流るる如く吾國の朝野に浸潤して吾國道徳の根本に培ひ、其發達を促して今日の大成を見るに至つたのであります。

次に儒道の本質に就いて申述べます。儒教の教理を説き示せるものに六經又は十三經がありまして

此等の經書を讀破すれば儒道の何たるかを了得することが出來ます。然かし之は容易の事ではありません。いかにせば比較的容易に儒道の要領をつかむことが出來るかといひますと、大學・中庸・論語・孟子といふ書物がありまして後世之を四書といひますが、此の四書を讀むことによつて比較的容易に儒道の要領を把握することが出來ます。更に此の四書の中で尤も簡明に儒道の本質を説き示してをるのが中庸であります。因つて此處では主として此の中庸によつて儒道の本質を明にしようと思ひます。中庸の開卷第一に天命之謂性。率性之謂道。脩道之謂教。とありまして、先づ儒道の三綱領たる性・道・教の三者を標出して儒道の根本思想を明にし、之によつて人道の大原は天に出でてをることと、人道の實體は天より授けられて人身に備はつてをることを言明してをります。今此の性と道と教とを簡單に説明しますと、天に元亨利貞の四徳があつて、之れが天體の運行、四時の循環等となつて現はれます。之を命といつて萬化の根本となるのであります。人は天地の氣を稟けて此體を成し天地の理を得て此心を成してをります。されば人の心には仁義禮智の四徳があつて之れが即ち性であります。人は此の性あるによつて父子の親・君臣の義・恭敬辭讓の節・是非邪正の分あり。是れ即ち道であります。性と道とは萬人同一なるも體氣を稟くことが同じからざる所から人に智慧・賢不肖の別生じ行に過不及の差あることとなります。唯聖人のみは生知安行である所から此道に因つて之を品節し法を立て教を垂れて萬人をして之に準據して行に過不及ならしめました。是れ即ち教であります。以

上が性・道・教の略説であります、此の三者中最後の教は總て政治・教育の法度施設となつて現はるるのであります。天命の性は道の由つて出づる所を示し、脩道の教は道の由つて全き所を示せるのであつて、中庸の作者は之によつて人道の淵源は天に在りとして儒道の根本義を明にし、之に次いで道德脩養の要旨は戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。に在るを示し、終りに脩養の極致に達したる聖人の絶大なる政治的功化を示して天地位焉。萬物育焉。と言つてをります。右は儒道の根本思想であります、其道徳政治に關する幾多の思想は總て此の立言に本いてをります。

儒教に於ける道德政治に關する思想の體系は中庸哀公問の一章に具在してをります。此の哀公問の一章は孔子が魯の哀公の問に答へて道德・政治に關する儒道を闡明せるものにて、孔子の道德・政治に關する思想の體系を見る可き重要なものであります、孔子の孫の子思即ち中庸の作者が之を引用して儒教の道德・政治に關する思想の體系として之を標出したのであります。以下其大要を申述べます。既に書經の初に五教、五典の文字が見えてをりまして、此の名目が上古に始まれることは疑ひありません。されど此の五典といひ五教といふことの何を指すかは示されてをりませぬ。其の之を詳にせるは中庸であります。即ち哀公問の章に天下之達道五焉。曰。君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。とあつて初て五典、五教の目を示してをります。そして此の五者は天下古今を通じて萬人の共に由る可き道なるにより之を達道といひ、五達道中特に君臣父子の道を重んじてをります。此

の五達道は天より人に賦與されたる徳性より發するものでありまして性と道とは體用の關係を爲します。五達道を知つて之を行ふには智・仁・勇の三徳を要します。智は斯道を知る徳であり、仁は之を行ふ徳であり、勇は之を成す徳であつて、此の三徳の力に因るにあらざれば斯道を行ふことは出来ませぬ。此に此の三徳の重要性があります。斯くて此の三徳は天下古今皆人の有たねばならぬものなるより之を三達徳と名けて重きを置いてをります。人は此の三徳を其身に具有するによつて初て斯道を行ふことが出来るのでありますから、之を養成することが肝要となります。それで此章では此の三徳を養成する功夫として好學と力行と知恥とを挙げ示してをります。此の功夫を用ゐて三徳を養成し得たる者は脩養の極致に達せる者でありまして所謂聖人といはるる人がそれであります。更に中庸では三達徳を以て五達道を行ふには誠の心を以てせねばならぬとしてをります。其行ふ所が表面いかに善であつても眞實ならざる所があつては眞の道とはいへぬからであります。其處に誠の尊さがあります。凡そ天道の自然に流行するは誠なるが爲であります。人も脩養の極致に達すれば其行ふ所自然に誠となります。此處に天人の合一を見ることが出来ます。

さて人は已に其身を脩め得たる上は更に進んで人を治めねばなりません。然らば人を治むるの道は如何。中庸には凡治天下國家有九經といつて政治を爲すには九つの常道ありとし、其目を列舉して脩身也。尊賢也。親親也。敬大臣也。體羣臣也。子庶民也。來百工也。柔遠人也。懷諸侯也。といひ、

そして此の九經を行ふにも誠の心を以てせねばならぬとしてをります。上に列舉せる九經を以て天下を治むることが即ち王道であります。王道の實體は仁政を行ふことであり、仁政の要は養民と教民とであります。養とは民に恆産を與へて其生活の安定を得しむることであり、教とは民を教へ導くに人倫の道を以てして其向ふ所を知らしむることである。儒教に於ける政治の根本義は正徳・利用・厚生に在りて、其要義は養と教とに盡きてをり、而して更に之を愛民の二字に要約して示すことが出來ます。

儒道の本質は大要上述の如くであります。此に儒教思想中の根本的のものである天に就いて更に申して置きます。古代の書に天をいふことは少くありません。天の義を大別して三とします。主宰を以てするもの、形體を以てするもの、自然を以てするもの、是であります。之を中庸に徴しても亦此の三種を出てをりませぬ。天命之謂性といひ、天之生物必因其材而篤焉とあるは主宰を以て之をいへるものであり、高明配天といひ、浩浩其天とあり、今夫天斯昭昭之多也とあるは形體を以て之をいへるのであり、誠者天之道也といひ、天地之道可一言而盡也といへるは自然を以て之をいへるのであります。天の意義には以上の三者がありますが、主宰を以てするものと自然を以てするものとは共に理に屬しますから、天の意義は要するに理を以てするものと形を以てするものとの二つとなります。そして後者よりは前者を重しとするはいふまでもありません。儒教では斯道の大原は天に在りと見る所

から天を敬し天を畏るる思想が誠に顯著であります。之を證明する爲に儒教の大成者たる孔子の敬天思想を申述べ可し。論語の中に孔子の言として君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。とあります。此の天命を畏るといふ意義は、凡そ人は生れながらにして明德を天より與へられてをる、言ひ換へれば宇宙の主宰者たる天は人間界をも主宰し、人間に對しては人間としての存在を爲さしめんとし、明德を賦與してをる。是れが即ち天命であつて、いかなる人も此の天命を有せぬはありませぬ。只之を自覺する者が少いばかりです。此の如き天命の其身に在るを知つて之を畏れ之を奉行せんとして努力する者を先知者といひ先覺者といひます。論語に天生德於予とあり、天之將喪斯文也、後死者不得與斯文也。とあるは其義を示したものであります。孔子は其身を處する上に於て常に天を對象として天を畏れ、天を敬し、天を欺かぬやう、天を汚さぬやうにといふ心を以て世に立つてをられました。論語に獲罪於天無所禱也とあり、予所否者天厭之天厭之とあり、吾誰欺、欺天乎。とあるは皆然りです。之に因りても儒教に於ける敬天思想のいかに深きものあるかを知るに足りります。かく深く天を敬する所より勢ひ丁重に之を祭ることとなるは自然であります。すれば儒教では極めて祭祀を重んじます。古から國の大事は祀と戎とに在りといひまして、國家の大事として尤も祭祀を重んじてをり、天神地祇を祭り祖先を祭るは禮の尤も大なるものとなつてをります。従つて祭祀の禮は早くより整頓され、甚だ丁寧を極め、恭敬の誠を致して神に奉仕することになつてをります。是は全く報本反始の心

の表現であります。

以上皇道と儒道の本質を略敘しましたが、之によつて兩者を比較して見ますと、殆ど總ての點に於て道の大綱を同じくしてをることが分ります。

一、皇道にては道の大原は天祖より出でたるものとしてをりますが、儒道にては道の大原は天より出でてをるとしてをります。儒教に於ける天は宇宙を主宰してをる神でありますが、吾皇道では皇國經營の基を創められたる天祖天照大神を指し奉るのであります。此處で考ふ可きは天祖と天の關係をいかに見る可きかといふ事であります。畏多き事ながら天祖に於かせられては其盛徳大業の上に於て天日と御同體にましまし、天地と同じく無限の力を具へさせられ、光曜赫奕として六合に照徹し給ひ、實に吾皇國を創造せられて皇國經營の基を開かせ給ふたのであります。此の意味に於て天祖は宇宙を主宰する所の天と全く同格であらせらるると考へられます。神武天皇の八紘一字の御雄圖は全く天祖の御遺旨を奉體せられたるものであることは申すまでもなき事と信じます。斯く考へますと皇道の淵源する所の天祖と儒道にていふ所の天とは二にして一なりと考へましても理由なき事ではありませぬ。

一、皇道に於て天を敬し天に事ふることを重んじてをりますが、儒道に於ても同様です。

一、皇道に於て祭祀を重んじ敬神崇祖報本反始の誠を致しますが、儒道に於ても同様です。

一、皇道に於て人道中特に君臣・父子の道を重んじますが、儒道に於ても同様です。

一、皇道に於て政治を爲すに愛民を本としてをりますが、儒道に於ても同様です。

此の如く道の主要なる點に於て兩者が一致してをることが明に認めらるるのであります。只此に皇道と儒道の相異點ともいふ可きは忠孝二徳の關係であります。儒道では古より孝は徳の本なりとして忠よりも孝を重んじてをります。是れ彼の國情の然らしむる所です。吾國では孝よりも忠を重んじます。是亦吾國情の然らしむる所です。然し此に特に注意す可きは儒道では忠と孝とは自ら二つの徳でありますが、吾國では忠と孝とは相合して一つとなつてをります。即ち忠孝一致です。儒道の方では孝を徳の本として總ての道德は孝道より生じてくるものとして之を重んじますが、吾國では忠孝一致を徳の本とし忠孝一致の上に道德が建設されてをります。是は申すまでもなく吾國の君臣の關係は單なる君臣の關係に止まらず、父子の關係をも兼ねてをりまして、畏多き事ながら皇室の御祖先と臣民の祖先とは元と家族的關係がありまして、天皇は吾等一般臣民の家長であらせらるるからであります。かかる關係より吾國の道德は發達して來ましたから忠孝一致となつたのであります。吾國に於ける此の忠孝一本の道德は獨り東洋に於てのみならず、西洋にても見る可からざるものでありまして、即ち世界を通じて其類例を見ざる吾國特有のものであります。そして吾が立國の基礎も亦實に此處に在ります。近來種種なる思想が海外より輸入され、中には忠孝一本といふ此の吾國の道德の根本思想と全

く相容れざるものもありますから、大に警省するを要します。

以上述べ來りたる所で分明なるが如く、吾國固有の道德即ち皇道と儒道とは殆ど總ての主要なる點に於て相合致せる所から、其傳來後歷代の天皇之を重んぜられ、之を獎勵せられましたので、恰も水の低きに就きて流るる如く吾國の朝野に行はるることとなりましたのは偶然ではありません。奈良朝より平安朝にかけて支那の文物が頻りに輸入せられ、制度・文學・美術・工藝等盛んに行はれましたが、殊に儒學は重んぜられ、儒道の經典たる孝經・論語を初め六經の書も大に貴ばれ、朝廷には明經博士の官も設けられたる程であります。降りて武家戰國時代には學問は一般には衰微しましたが儒教は依然として武士の間に行はれ、武家戰國時代に發達せる武士道は儒教とは密接なる關係があります。當時の武士道に尙ふ所は義勇廉恥であります。是れ儒教にても大に重きを置く德であります。當時の武士に自ら義勇廉恥の心がありまして、此心が儒教の援助によつて其時代に適應したる形を爲し、武士道と爲つて現はれたのであります。更に徳川幕府に至りては天下の公學として儒教中特に朱子學を獎勵しましたので、盛んに其發達を來し、其大義名分を重んずる思想は吾國の尊皇精神を鼓舞して大に朝野の人心を動かし、其精神の澎湃する所遂に維新回天の大業を翼賛して明治の隆運を將來するに至つたのであります。

斯く儒教は吾國に傳來してより今日に至るまで約千七百年の間に互り吾國固有の道德の根本を培養

し愈之を發展せしめて今日に至り、今日にては儒教を離れては吾國の道德を見る能ざる程の密接なる關係を生ずるに至つてをります。斯く觀じ來りますと吾國の道德が儒教に負ふ所の大なるものあるは言ふを待ちませぬ。一體儒教の大成者たる孔子の思想は日本的であります。孔子其人は偶然支那山東省の一角に生れたたのでありますが、其思想は日本的であります。支那の學者はいかに偉大な人であつても革命國に生れた上は革命を容認せざるを得なかつたのでありますが、孔子は獨り之と異なつてをりまして、人倫の中にて尤も重大なる君臣の關係については吾等日本人のその如く萬世一系を理想としてをりました。此の一事已に孔子の教が吾國の國體なり道德なりと一致して相戾る所なきを見ることが出來ます。でありますから其傳來によつて吾國固有の道德と今日見るが如き融合一致を來しました事は決して偶然ではありません。

終りに臨みまして光輝ある皇紀二千六百年を回顧して見ますと、一面には誠に國民として大に慶祝す可き年であつたと存じますが、一面には誠に多事多難の年でもあつたのであります。今や支那事變も世界事變へと進轉しまして、前途益多事多難を豫想させますが、吾國としては聖戰の目的たる東亞新秩序の建設といふ此の大事業を達成するまでは、少しも手を緩めることは出來ませぬ。それこそ一億一心力を合せて此の目的完遂に向つて進まねばなりません。此に二千六百年の年頭に、又同じく其紀元節に詠じましたる拙作を朗吟して今日の講演を了ります。(昭和一六、一、一一、土曜講演)

皇紀二千六百年元旦恭賦

無缺金甌傳自天。隆隆皇德八紘宣。斯迎嘉歲真堪賀。肇國二千六百年。

皇紀二千六百年紀元節恭賦

六合奠都宇八紘。帝謨宏遠照寰瀛。贊襄聖業須今日。億兆一心期達成。

